

年中無休で夕食提供

ここにいるよ

沖縄子どもの貧困

第4部 支援の現場から
(13)

②

子ども食堂②

「また来たよ」「きょうの飯、なあに?」。午後5時半すぎ、沖縄市住吉のゆがふう子ども食堂で小学生たちの元気な声が響いた。「お、久しぶり。元気だった?」。若いボランティアスタッフが笑顔で迎える。晩ご飯食べた、全力でマッスルじゃんけんしような。体をひねったり、片足を上げたりして説明するスタッフの姿に子どもたちははしゃぎ声をたてた。

教会は毎日午後5時半~7時半、子どもに無料夕食を提供する「ゆがふう子どもサロン」を開いている。溜池をしたり、遊んだりできる地域の遊場所。NPO法人アップスキーパースやPNOウーマンスプライドなどが協力して運営する。多くの学生や米軍関係者が一掃に遊んだり、勉強を教えるなどのボランティアで関わっている。

県内には子ども食堂が約20カ所あるが、毎日オープン施設は珍しい。牧師の西野眞澄代表は「続けるのは大変だが、おなかを空かすのは毎日のこと。必要とする手に『今日は休み』というわけにいかない」と説明する。

子どもが来所する前のミーティングで、スタッフの仲間内オミさんが「子どもたちのみんなとこのエネルギーを解放させてあげることが大事」とほかのスタッフに呼び掛けた。「受け入れられるというところに、とても大切な子が多い。人には真心がある。よい方向に向かっていくようにするのが大人の役割だ。ボランティアの大学生たちが真剣な表情で聞き入った。毎日幼児や小学生約20人が利用する。ひとり親家庭の子、祖父母に育てられている子、夜に親が働いている子、母親に新しい恋人ができたばかりの子など、さまざまな背景がある。

ある高学年の子は通い始めたころ、スタッフが何を言っても

荒れた言動愛情受け心開く



子どもたちと食卓を囲むゆがふう子どもサロンの西野眞澄代表(沖縄市住吉)

くようにするのが大人の役割だ。ボランティアの大学生たちが真剣な表情で聞き入った。毎日幼児や小学生約20人が利用する。ひとり親家庭の子、祖父母に育てられている子、夜に親が働いている子、母親に新しい恋人ができたばかりの子など、さまざまな背景がある。

ある高学年の子は通い始めたころ、スタッフが何を言っても

「うるさい」「駄目な」と険しい表情で目も合わせなかったが、半年間、毎日食事に来るうちに心を開き始めた。今では西野さんのひざに乗ってじゅれ合ひ、スタッフと笑顔でボール遊びを楽しむようになった。

西野さんは「愛情を受けると人は成長していく。聖徳園がいたといわれる子もいるが、みんな素直な心を持っている。根っからの悪い子なんて一人もない」と強調する。

ウーマンスプライドのスマイス代表は「食事提供だけでは

不十分だと分かっていた。母や祖母から問題が続いている例や養育費なしの離婚なども多い。原因になっている家族の問題を解決できないと、貧困の連鎖を断ち切れないと課題を挙げる。

地域の小学校と関係づくりを進めてきたが、家庭や地域との関わりをさらに強めたい考えだ。

教会らしく、食事前には必ず全員で日々の糧に感謝し、祈る。家族だんらんして食卓を囲んだ経験に乏しい子どもたちの中には当初、寝転がって食べる子や偏食が激しい子もいたが、習慣化する中で徐々に改善している。

プロミスキーパースは子どもとホームレスや生活困窮者を支援してきた。幼少期の貧困経験に起因する例も多く、そうなる人を減らしたいという。子ども食堂を立ち上げたという。

「小さいうちでこの飯食べてたなあ、ついで笑って振り返る大人が一人も多くなってほしい。西野さんはそんな願いを込め、毎日の活動を受ける。(子ども)の貧困一取材班・田嶋正徳

随時掲載